

# 東書藝

令和5年12月

<http://www.toshogei.jp/>

## '23 東書藝夏期研修会

蒲郡市 ホテル竹島

五年九月三日～四日、四年ぶりの東書藝夏期一泊研修会が蒲郡市ホテル竹島で開催された。長いコロナ禍で中止を余儀なくされてきたが、漸く行うことができた。続く猛暑の中、参加者総数八十名、久しぶりの心地よい高揚感だ。

山本晴城副理事長開会の言葉のあと、副理事長・安藤餘香、伊藤春魁、常任理事・石黒鴻羽の三先生による講話「私の臨書観」、休憩をはさんで理事長・木村大澤先生の鄭道昭・鄭義下碑の解説と臨書添削、続いて常任理事・堀江龍舟、内田箕山両先生による臨書の実践（董其昌、八大山人）。スクリーンに手元を映しながらの実作は明快でわかり易い。三先生とも流石の技量と解説で、時にユーモアも交えて会場全体を魅き付けた。また総評を述べられた会長・風岡五城先生のお話も内容濃く、実のためになる有難いものだった（講話と共に次項に要約を掲載）。最後に副

理事長・富永奇昂先生の閉会あいさつで終了となった。

大広間での懇親会は大村名誉会長秘書の杉浦一隆先生をお迎えして和やかに行われた。本当に久しぶりの各社中の交流で、参加者皆の笑顔があふれていた。

翌朝は各自バイキングの朝食の後、名残惜しく解散となった。

充実の宿泊研修会。企画・司会・講話と大車輪の働きをされた石黒鴻羽研修部長に大いなる感謝とねぎらいを届けたい。



富永奇昂先生



内田箕山先生



堀江龍舟先生



木村大澤先生



山本晴城先生



## 講話「私の臨書観」(要約)

### ① 安藤餘香先生



安藤餘香先生

私が最初に臨書に触れたのは高校に入った選択授業で、今までは手本を貰って書くという事しかやってこなかったので、「臨書」を理解するのに大分時間がかかりました。中国の古典を見て先ず形臨から入るのですが、これまで文科省系の手本を習ってきた者にとって、真似るといっても古典の見慣れない文字なので勝手に直してしまったりで、法帖や拓本を見て自分で書くという事に慣れるまでに時間がかかった。それでも学校の選択授業とか毛筆書写技能検定の勉強をしながら、少しずつ臨書というものに馴染んでいく事を覚えていきます。楷書

なら九成宮、孔子廟、皇甫誕碑、孟法師碑、雁塔など一般的なものを習ってきましたが、検定の為の勉強だったりしたので、最初のころは深く学ぶというより広く浅くという形。検定に合格してからは、もっと深くやってみたいと自分になっていった気がします。

よく古典に立脚した作品が理想と言われますが、臨書の学びを作品に生かす事は難しいと感じています。全臨までは中々できませんが、好きなあらゆる古典を臨書することによって、色々な筆遣いを学べる事が大きいと思います。かなり深く学ばないとその表現が出来るようにならないので、それが自分の技術を磨く事になったと実感できています。私は得意でないですが、きちっとした線・筆の動きなどから、唐代のきちんとしたものが一番いいと思います。また清代の楊守敬など新しいところも好きです。

これからも作品に生かせる

よう、しっかりと臨書を続けていく事が自らの作品の向上に繋がると思っています。

### ② 伊藤春魁先生



伊藤春魁先生

「私の臨書観」という事ですが、自分はこうして古筆の臨書をしているという話をしたいと思います。まず、臨書対象を平安の物に限るか、鎌倉までか、或いは室町・江戸まで含めるのか。色々な議論はあると思いますが、私は平安時代のもの臨書が良いと思います。何故かという点、時代が下がってくると字形が崩れたり、側筆が多くなったり、筆も全部おろして書いているのか濃淡もないように感じます。これらの理由で臨書の対象になりにくいと思います。

私は初め高野切一種を習い

ました。よく理解もできなかったが、ただこれを習って、とにかくゆっくりと書く事だけ覚ええました。臨書の第一歩はそれで十分と思っています。次に習ったのは、資料にもある寸松庵色紙。高野切と違い変化があつて、楽しく習ったことを覚えていきます。その後一番習ったのは関戸本古今集です。私は大字仮名を主に書活動をしているので、古筆から大字仮名に展開する時に、やはり表情豊かな関戸が大字に展開しやすいと、今も習い続けています。この関戸が私の書のベースになっています。自分では思っています。君の書は古筆のにおいがしないと云われた事もあります。自分に書の拠り所がそこにあればいいのではと思います。臨書をするという事はそういう事だと考えています。

そして、全臨を否定するものはありませんが、私は部分臨書を多くしています。何故かという点、全部書き進めようと考え無しに書いてしまつて後でほとんど頭に残らないことが多く、それを創作

に繋げようとしても難しいと感じるからです。和歌なら一首をとことん習います。言い換えれば分析的臨書。これをしないと臨書を創作に生かせない気がしています。

(資料・寸松庵色紙一首を示されて)古筆から何を学ぶか「字形の大小・長短の変化、連綿線の変化(太さ・角度・長さ)、字幅の広狭、墨量或多或少など、細かいところに目をつけて見ていくと、字形だけしか見えなかったこれまでとは違ったものが見えてきます。漠然と臨書する人はいないと思います。注意深く見落とさないようにしています。この作業で細部が読み取れるか否かが肝要であると思っています。

(3) 次に配字について見てみると、左右に傾いたり真っ直ぐだったり、行の中心がやや右に移動して流れる。文字の組み合わせを見ても、様々な変化があつて面白いと思います。その組み合わせは日本庭園の飛び石と通じるものがあると感じています。そして京都龍安寺石庭の十五個の石の配置

は、平安時代の継色紙の空間に通じ、仮名の空間の美を感じます。古筆ではないですが、東書藝会長であられた、澤井瘦蛙子先生の素晴らしい作品を自分なりに研究させて頂いた時に、文字を籠ってみると落款を含めて飛び石に通じるものがあると感じました。

疎密についても同様で、細かく分析する必要があります。一つのことを分析すれば全て良くなるわけではありませんが、一つを深く分析することによって他のことも分析する力が養われていきます。例えば連綿を分析することにより、他のことも理解しやすくなるのではないかと思います。

誰にも好きな書家がいると思いません。その作品集とかをそっくり真似てみることも良いと感じています。そして古筆と照らし合わせてみると、大体立派な先生の作品には、なるほどと思うことがあります。これももう一つの臨書と言つていいのではないのでしょうか。

以上私の臨書の仕方を述べてきましたが、これで創作が

上手く出来るかと言えば簡単なものではないと思います。しかし皆さんには有難い師匠がおられるので、今まで習ってきたことにプラスしてもらつて作品を創つてほしいと思います。自分よがりの作品でなく、客観的に見ていい作品を創るには、やはり古筆の力を借りなければなりません。私たちは、古筆・古典を基に個性豊かなものを書くことを究極の目標としなければならぬと考えます。臨書のための臨書に終わらない、創作に繋がる臨書でありたいと思っています。

### ③ 石黒鴻羽先生

最初に、基本は自分が好きなものを習うことだと思つた。振り返つてみれば、大学で書を学ぶようになりましたが、二年の頃黄庭堅の書がとても魅力的に感じました。横画が伸びやかに張り出し、字形にも魅かれたと思います。次は二、三年時王鐸に。条幅も卷子も自由な筆法に魅力を感じました。卒業も王鐸風で二尺×

八尺四本を書きました。卒業後は北魏の書を習いましたが、特に賀蘭汗造像記が好きでした。張猛龍もいいが、素朴などっしりとしたものに魅かれた時でした。その後は連綿のない、切れのいい草書の書譜。それから木簡の臨書は十年以上で、最近としては顔真卿の行書・祭姪文稿。そんな風に魅かれた古典を眺めてみると、賀蘭汗だけは異質だったかもしれませんが、自分のリズムに合うものと、ちよつと違うものもあるなと感じます。王鐸、最初は行書詩巻でしたが歳を重ねて草書詩巻の方が好きになり、それは自分の感じ方も変わってきたんだろうと、そんな事にも気付きました。



石黒鴻羽先生

二番目としては、本物を見る大切さ。大学二年の時に故宮博物院へ行き、名だたる名品を見たのですが、墨色の艶やかさや実物の文字の大きさなど、今も記憶しています。

やはり、本物を見ると強い印象が残るのではないでしょう。それから原典のサイズを知ると、臨書がまた違ってきます。拡大したりして良くなることもあったりする。新しい発見や魅力が生まれるかも知れませんが、三十帖冊子は難しいけれど、長く取り組みたいものです。

三つ目は字形の捉え方。以前、王鐸の字書を自分で作ったりしました。今振り返ればよくやったなと思いますが、形を覚えるには大変いい勉強になりました。

色々な先人の臨書を自分と見比べるのも面白いと思うし、解釈は自由だと解ります。違う発見もあって、そしてまた自分の臨書に戻ってあげたいのでは。

それから半紙・条幅作品に向かう時、最終的に古典に一字一字似ていなくてもいいと

学ぶことがありました。作品にとして仕上げていくことを第一に置くのが大事、との理解です。あと、文房四宝では紙が最重要と思います。研究すると面白いです。

資料として、日下部鳴鶴・比田井天来・上田桑鳩・川谷尚亭・今井凌雪の五先生の臨書について調べてまとめましたが、各先生とも凄いい勢いで猛烈に臨書をされている。徹底した臨書を基本にして書の研究に邁進されたのです。

最後に今井先生の言葉で「臨書の魔力」ということがあります。名跡の魅力に取りつかれて、近づければ満足となり易いのですが、臨書は創作のための基礎学習と銘記したい。臨書のための臨書でなく、それぞれに消化して模倣から脱却し、自由な個性の表現に発展させていくことが大切だということ。

以上、私が長く続けてきた臨書についてお話ししました。これで終わりとなります。

## 総評―研修を終えて―

会長 風岡五城先生

皆さん、いかがでしたか。これからの東書藝を担っていく若い人の発表を聞いて、頼もしく思っていました。

書というものは不思議なもので、今日解ったと思っていたら明日になると解らなくなることがあります。その時はやはり原点に戻るといふか臨書に戻るのが大切です。私は書はリズムだと言っています。子供たちの書く姿を見ていて、上手い子は遠くから見ても判ります。基本的なイメージがあつて、それをどういふ風に表現するか。体の動かし方、呼吸、タイミングとかがあり、それらから書は確かにリズム感が大事だと思えます。

臨書をする時もこの原本はどういう呼吸で書くといいか、全体にゆったりなのかキビキビしているのかを考えるのです。しかしいくら臨書をして、ただ真似るだけでは本当に自分のものにはなりません。臨書をして色々取り入れたもの

のを、一度自分の中でバラバラにして、再度構築した時に自分の書に生かせるようになるのではないかとそんな気がします。そのあたりをどういふ風にしたらいいのかは、それぞれ皆違うと思います。やり方は一つではないでしょう。とにかく臨書をやり続けることだと思えます。色々な方法でやってみる事です。自分でなるほどと思う事を少しずつでも貯めていくことが大切です。人がどう云おうと自分が思う事をぬけぬけとやってみせる勇気がほしい。そしてそれを続けていくことが肝心だと。今日はそんなことを思いながら聴いていました。



風岡五城先生

# 追悼 岩田冬崖先生



令和五年  
六月二十日  
に逝去され  
た常任参  
事・岩田冬  
崖先生。ここに好日社でも

に歩んでこられた参事・鈴木紫舟、本瀬芝青両先生に寄せていただいたお言葉を掲載し、あらためて哀悼の意を表します。

合掌

## 岩田先生を偲んで

参事 鈴木紫舟

六月二十日、岩田先生が七十七歳で亡くなりました。

コロナ禍、奥様より「親族で静かに送ります」と。葬儀前日、社中数名でお別れに伺いました。先生は、昨年暮れに余命宣告され五月初めに入院されるまで、教室・錬成会で指導。四月の錬成会で、心象展の手本を数枚書いてはお腹を押さえる：「大丈夫です

か？」と声をかけると「書いてる時は大丈夫」と気丈にしておられました。心配しました。六月五日に手術の連絡が入りましたが、手術を受ければ良くなると信じていました。

先生とは稽古の教室が違い、学生の頃錬成会にて出会ってから五十年の歳月が流れました。社中の手伝いなど「鈴木さんこれ頼む」「これ教えて」「え、何ですか？」いつの間にか合言葉のように：常日頃から先生は「社中のレベルを上げんといかん。東崖（梶田）先生の直弟子はあと数名。先生の意志を繋げないと。」と話していました。この言葉を肝に銘じ、バトンを繋ぐ!!  
在りし日、「その文字書かせて」って、私の筆でサツともものすごい勢いで書いては「作品出来た!!」。こんな風に、「頭に何もないけど」と言いながら即興で作品や手本を書いておられました。

もう一作品書いて頂きたかった。社中の研修旅行、忘年会：あんな話こんな事、思ひ出は尽きません。ご冥福をお祈りいたします。

## 岩田冬崖先生と褒斜道

参事 本瀬芝青

岩田先生に初めてお会いしたのは、私が好日社に入会した頃でかれこれ五十年前も前のことです。私は梶田東崖先生の六軒屋教室に通っていたので、岩田先生にお会いするのは毎月開かれていた社中合同の錬成会の時だけでした。

その錬成会で、岩田先生が半紙練習されていた「開通褒斜道刻石」を拝見して深い感銘を受けたのです。まだ二十歳代の先生が、見たこともない筆遣いで見事な臨書をされているのに驚き、是非自分も褒斜道を学んでみたいとひそかに思ったのでした。その思いを知ってか知らずか梶田先生から褒斜道をやりなさいと云われ、大喜びで一生懸命臨書に励みました。いつか岩田先生のような作品が書けるよ

うになりたいと本気で思っておりました。後年、先生から私の褒斜道を褒めていただいた時は心から嬉しかったものです。

最後に好日社会報から、岩田先生のお言葉を紹介したいと思います。「文字を書くことは実用であり、作品は実用の原理を踏まえつつこの原理・約束事を心の動きに従って破り、自らの世界を創造するものです。」

先生の作品を見るにつけ、一見奔放な筆致の裏にはあの錬成会で見た臨書のような、不断の努力があったのだと改めて感服します。

好日社代表になられてからは、会の発展と書作品の指導に骨身を惜しまず尽力していただきました。岩田先生、本当に長い間有り難うございました。どうか安らかにお眠りください。

'23今日の書展作品



五年 東書藝代表作家展作品





書展訪問

第26回東書藝選抜小品展

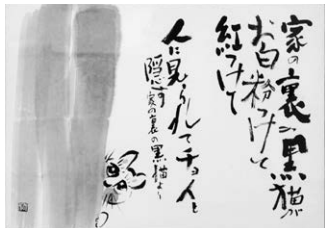
九月十二日〜十七日、栄サ  
ンシTEEイーギャラリーで開催。  
七十回展で高評価を受けた院  
人三十四名を選抜。小品はア  
イデアとセンスの小宇宙。で  
きるだけの紹介です。(敬称略)  
横井青蓮蘇軾の詩から朱白二  
類。確かな技法で味わい深い。  
服部草心朴訥な書きぶりで落  
款周りの余白が美しい。石山  
荷心猫の画が仮名交じりの表  
現とよく調和して愛らしい。  
伊藤美どり繊細な筆致  
と構成で線条が美しい。  
仙田秋来芯の強い線質が、語  
意とよくマッチしている。八  
木一華金農ふうの書きぶりで  
雰囲気の良い額装作品。千田  
嘉穂隷書体三文字が色彩のあ  
る紋紙にピタリ収まった。



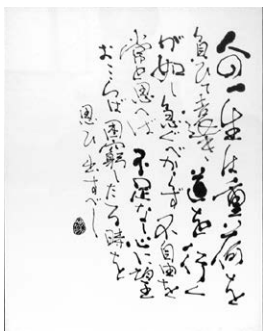
「蘇軾詩」  
横井青蓮

金子由美  
子徳川家  
康遺訓

を漢字  
かな交じ  
りで。ポ  
イントを  
右側に置  
き、飄々  
として面白い。他にも秀作多  
数、見応えある展覧だった。



「家の裏の黒猫」 石山荷心



「徳川家康遺訓」 金子由美子



「夏雲多奇筆」 服部草心



「徳不孤必有隣」 仙田秋来



「爛漫」 八木一華



「秋の七種」 伊藤美どり



「黄葉樹」 千田嘉穂

出品者	
飯田松華	石山荷心
伊藤一楓	伊藤美どり
岩井玲翠	岩崎青玲
内海清秋	大山湯泉
小川若紫	賀田野春汀
角脇尚園	金子由美子
北原竹堂	小山豊泉
佐野小徑	澤麗水
柴山三華	清水玲飛
須藤春華	千田嘉穂
仙田秋来	高橋雅
遠山穂光	豊田月花
布目一路	橋口賢岑
畑中美影	服部草心
平田美泉	藤枝静香
三村菱花	八木一華
山本美峰	横井青蓮

第49回宏道書展

八月二十二日〜二十七日、  
電気文化会館ギャラリーで開  
催。山本晴城代表率いる宏道  
書会の一般部百三十四点、ペ  
ン作品二十五点、学生部は  
半紙・硬筆・色紙合わせて  
五百五十三点が展示された。  
東書藝幹部が多数揃う会の展  
覧は流石に見応え十分。来場  
者が実際に書く体験が出来る  
「街なか書道体験」コーナー  
もあり、盛会だった。



街なか書道体験

## 第65回記念游心書展

九月十二日～十八日、愛知県美術館ギャラリーにて第65回記念游心書展が開催された。長い伝統を誇る游心書道会。展示総数は五十六点で、記念の見事な図録を作成された代表の松浦白碩先生は、「若い人たちがだんだん育ち始めた」と明るいお顔で思いを寄せて下さった。

### 第65回展を終えて

代表 松浦白碩

游心書道会は、小川南流先生が創設され、昭和三十二年に第一回展を豊田ビル画廊で開催して以来、今日まで続いています。この間、南流先生が平成十一年に、また圭南先生は平成二十五年にご逝去されましたが、以後会員が一致団結して現在に至っております。

(7) 今年には記念の六十五回展。これまで五年ごとに記念事業として図録を作成してきました。今回も全員が両先生からご指導を受けた書法を基に、

篆・隸・楷・行草・仮名で表現し作り上げました。中でも高齢の会員は体調と相談しながら、高い水準で期日に間に合わせてくれました。感謝、感謝！です。

この度は、開催期間が東書藝選抜小品展・読売書法展と重なったこともあってか、多くの来場者に恵まれてラッキーでした。

連日の猛暑の中、ご来場いただきました皆様には心から御礼申し上げます。今後も益々頑張つて参ります。

会長 松浦白碩



松浦白碩代表



## 第39回清和会書展

八月二十二日～二十七日、名古屋市民ギャラリー栄で開催。西尾邑城代表の力作「書譜節臨」はじめ、会員作計二十八点を展示。作品の題材やテーマがバラエティーに富んで楽しめる。どれもが真摯に書き込まれていて来場者の心に寄り添ってきてくれる。そんな好印象の展覧だった。



### '23 心象展

九月五日～十日、愛知県美術館ギャラリーで開催。鈴木紫舟新代表のもと、会員作品



鈴木紫舟代表  
冬崖先生作品と

五十六点を展示。岩田冬崖先生亡き後、より一層結束して力を尽くしたと柴舟先生。冬崖先生の「麟鳳龜龍」が輝く。悲しみに負けない想いのこもった作品が並び、心打たれた。更なるご発展を。

### 第57回碩山書院一門展

九月九日～十日、蒲郡市民会館東ホールで開催。大竹翠葉代表以下、風岡五城先生賛助作品も含めて会員作計74点の展示。例によって学生部百三十一名の作品も並ぶ。



代表は五  
点の力作  
で素晴ら  
しい。外  
の暑さに  
負けない  
熱気の伝  
わる好展  
だった。



大竹翠葉代表

学生部作品

### 2023第41回飯田書人会展

#### ― 幽石書道会合流展 ―

九月二十二日～二十六日飯田創造館。加山幽石先生代表。今回、幽石書道会が飯田書人会に合流して新たな出発となった。飯田書人会二十五点、幽石書道会から四十八点。故豆子甲水之先生の教えを引継ぐ加山代表の、会場で各出品者全員に作品評をされる姿が強く印象に残った。



加山幽石代表  
榊田白蓮助講師

### 第23回心書会展

十月七日～九日、亀山市文化会館中央コミュニティセンター。故・豆子甲水之先生墨画を併せて特別展示。安藤清

舟代表はじめ会員作五十二点の展示で、学生部軸作品も立派だ。代表は迫力の大作で線に緊張感が漲る。全体が伝統書の本流を行く格調高い好展だった。



安藤清舟代表(左)

### 第46回公募梓会書道展

十月三十一日～十一月五日、愛知県美術館ギャラリー。勝川香艸会長・伊藤春魁理事長が力強く率いる。特別出品二点を含め出品数百十四点、公募作品二十五点のマンモス展。迫力と優美さを両立した大字仮名作品がずらりと並んで圧巻の展覧だった。



### 今後の予定(令和6年)

#### ◇24今日の書展

会期 1月10日(水)～14日(日)

会場 愛知県美術館ギャラリー

主催 中部圏書芸作家協議会

中日新聞社

※祝賀会 1月9日(火)

メラルク名古屋

#### ◇第40回記念花墨会展

会期 1月20日(土)～21日(日)

(5年11月予定より変更)

会場 三重県菰野町図書館2階

主宰 松岡麗泉

#### ◇第59回新春東書藝代表作家展

会期 1月23日(火)～28日(日)

会場 名古屋電気文化会館東ギャラリー

主催 東海書道藝術院

#### ◇東書藝院人研修会

日時 2月11日(日)

会場 愛知県芸術文化センター12階

アトースペースA

#### ◇第39回景雲社「絆」書道展

会期 2月12日(月)～18日(日)

会場 クリエート浜松3階ギャラリー35

主催 景雲社(勝田晃祐)

#### ◇第14回有隣書展

会期 3月20日(水)～24日(日)

会場 岡崎市美術館

主催 有鄰会(安藤餘香)

◇第71回公募東海書道藝術院展  
会期 4月9日(火)～14日(日)

第一会場 愛知県美術館ギャラリー

第二会場 名古屋市民ギャラリー栄8階

開場式 4月9日(火)

午前10時第一会場にて

贈賞式・祝賀会

4月14日(日)

名古屋ガーデンパレス3階にて

11:30受付12:00開始

主催 東海書道藝術院

中日新聞社

### 編集後記

◇蒲郡市での一泊研修会は好評のうちに幕。それぞれの臨書観を一段と確かなものにした。

◇コロナ感染症も少し落ち着いてきただろうか。大きな節目を越えた東書藝は来年四月、七十一回展を迎える。伸びやかな心持ちで大いに頑張りましょう。

◇皆様、どうぞ良い新年を。幸多き年でありますように。

令和五年十二月 第一五〇号

発行 東海書道藝術院

編集 加藤 松亭

堀江 龍舟